

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520091

研究課題名（和文） 観光行為の哲学的基礎づけによる観光美学の構築

研究課題名（英文） Constructing aesthetics of tourism by philosophically analysing
touristic activities

研究代表者

津上英輔（TSUGAMI Eske）

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：80197657

研究成果の概要（和文）：

観光とは快のための旅である。ところが従来の観光研究において、個人を観光に駆り立てる快の本性については、論じられなかった。その結果、社会的行動としての観光の重視と個人的行為としての観光の蔑視との間の齟齬が解消されずにいる。本研究では、観光者の写真撮影、旅先での美食とショッピングについて観光学の成果を踏まえた美学的考察を行ない、観光の快が美的＝感性的（aesthetic）なものであることを確かめた。

研究成果の概要（英文）：

Tourism is a travel for pleasure. But the nature of the pleasure that drives us into a tour has not yet been made clear. The result is a chronic discrepancy between the appreciation of tourism as a social activity and its depreciation as an individual activity. This project has concluded, by examining tourists' habit of photographing, shopping, and eating local food, that the pleasure involved in tourism is of aesthetic nature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：美学

科研費の分科・細目：哲学 / 美学・美術史

キーワード：美学, 観光

1. 研究開始当初の背景

観光は感性的営みであるにもかかわらず、一般には単なる娯楽ないし蕩尽でしかないと考えられている。その結果、観光者自身がどこか後ろめたい感覚を持ち、また地元の人からも、観光者は低くあるいはいかかわりな目で見られている。これは観光というものの本質が認識されていないことに起因する。事実、これまで観光について、経済的、文化人類学的議論は積み重ねられてきたものの、哲学的分析の対象とした考察は世界的に見てもほとんど例がない。

そこで、もしここに、観光とは芸術鑑賞と並ぶ、すぐれて感性的な営みであるという認識が加われば、観光行為が観光者自身にとっていっそうあじわい深くなるばかりでなく、地元の人が観光者から受け取る精神的効用を正当に評価することにもつながるはずである。さらに、ディズニーランドに典型的に見られるように、観光施設がしばしば感性の操作を行なっているという事実を、感性の学たる美学の問題として考察し、必要に応じて社会に警告していく必要がある。

2. 研究の目的

観光とは快のための旅である。その快を美的＝感性的なものにとらえ、美の快について美学の中で積み重ねられてきた知見（とりわけカントの議論）を観光に応用するとともに、観光研究の成果を美学に適用し、以って両分野に跨る新たな研究領域を確立することが、本研究の具体的目的であった。これは人々の観光観の変革という最終目的を実現するための理論的前提をなす。

3. 研究の方法

観光者の代表的観光行為として、写真撮影、美食、ショッピングを取り上げ、観光学の成果を美学の観点から分析した。その際、快を、

感性的快すなわち快適と精神的・感性的快すなわち美の快とに分けるカントの理論を参照して、観光が一般に思われているように前者の快にかかわるのではなく、むしろ後者の美の快を追求する営みであることを考察の理論的前提とした。また、美学の出発点としてバウムガルテンの『美学』を参照し、彼の美の定義「感性的認識の完成」を改変して、「感性的認識への完成」を提唱した。つまり、観光行為において、知識や単なる好奇心のような非感性的要素が感性的要素と合して、感性的なあじわいに結晶するという事態である。

そのような理論的研究と並んで、実地の観察による検証も行なった。すなわち、オペラ劇場という、西洋人にとっての代表的観光対象の一つが、いかに感性的経験を促進しているかを観察した。具体的には、スウェーデン、ストックホルム市郊外のドロットニングホルム劇場において、200年以上前の劇場建物と舞台装置がそのままに保たれていることが、そこで上演されるオペラを「真正(authentic)」なものと感じさせ、オペラのあじわいに貢献しているさまを観察した。同様の観察を、ドイツを中心とするヨーロッパ各地の劇場についても行ない、ドロットニングホルムでの観察が特殊例ではないことを確かめた。

また、沖縄県渡名喜島という、それ自体で完結した小さな観光地を選び、島の人々の生活と観光者の観光行為との関係を観察した。その際、Allen Carlsonの言う“scientific cognitivism (科学的認知主義)”に並行する“cultural cognitivism (文化的認知主義)”を提唱し検証を試みた。

最後に、ショッピング行為の典型として、日本のおみやげの習慣と西洋的なsouvenirと比較した。おみやげ習慣は、伊勢神宮のお札を一つの起源としている。すなわち、江戸時代、全国の村々から伊勢講の代表として伊勢神宮に代参した人が、村人におみ

やげとしてお札を買い戻ったという歴史である。このような共同体的習慣が現代人のおみやげ購買行為にどの程度残存しているかを観察し、あくまでも個人の、自分自身のための行為である西洋の souvenir 購買と比較した。

4. 研究成果

写真撮影、観光先での美食とショッピングという代表的観光行為それぞれにおいて、感性が著しい働きをしており、いずれも感性的行為であることが、観光学の研究成果を哲学的・美学的に考察することから確かめられた。その際、知識や道徳意識あるいは単なる好奇心が、観光行為の中で、感性的なあじわいに結晶することが、理論的、経験的に確認された。また、それに付随して、町の散歩、とくに外国の町並みとの比較の目をもった散歩が、小観光と言いうる資格を備えていることも明らかになった。

ヨーロッパの劇場の観察からは、劇場施設の真正性が感性的なあじわいそのものではなく、「あじわいづけ」とでも呼ぶべきものであり、そこでのオペラ経験が感性的経験として結晶するのを助けていることがわかった。しかし見方を変えれば、劇場が観光者の経験を、政治や経済への関心から感性的関心へと誘導している事態とも考えられ、ディズニーランドと基本的には同形の誘導原理がここに働いていることもわかった。

渡名喜島での観察からは、観光者が地元の人々の生活に深く接し、島の政治的、経済的、文化的状況を深く理解すればするほど、観光行為がいつそうあじわい深いものになることが、主として観光者の写真撮影行為の観察からわかった。

おみやげの観察からは、現代日本のみやげ物が食品を中心とすること、この習慣が江戸時代以来の伝統を引き継いで、いまだに道徳的、倫理的性格が強いことが確認された。それに対して、西洋的な souvenir は、自分のための飾り物、置物を中心とし、感性的な要

素の勝ったものであることがわかった。

全体として、観光が感性の営みであるという命題は、本研究を通じて理論的、経験的に確立されたと言ってよい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①津上英輔 「感性的質の生成構造、または感性史の試み」(2010年6月, 美学会発行『美学』. 査読あり. 第236号, 1-13ページ)

②津上英輔 「懐かしさとnostalgia: 比較美学から感性史へ」(2010年3月, 成城大学大学院文学研究科発行『美学美術史論集』. 査読なし, 第18号, 140-164ページ)

③津上英輔 「運動を管理する音楽: 服部正作曲<ラジオ体操第一>の分析」(2010年3月, 成城大学大学院文学研究科発行『成城美学美術史』. 査読なし, 第18号, 1-15ページ)

④津上英輔 "Presence of the Past: Nostalgia as an Aesthetic Category" (2010年3月, 広島大学文学部発行『第12回日韓美学研究会報告書』. 査読なし, 221-226ページ)

⑤津上英輔 「感性的営みとしての旅—観光美学の構築に向けて」(2008年6月, 美学会発行『美学』. 査読あり. 第232号, 2-14ページ)

[学会発表] (計3件)

① 津上英輔 "Topology of Aesthetics: Through a Comparison of *Omiyage* and *Souvenir*" (2010年11月4日. 第2回成城大

学国際芸術学コロキウム，成城大学)

②津上英輔 “ The Evolution of Aesthetic Qualities: Toward a History of Aesthetic Sensibility” (2010年8月9日 第18回国際美学大会，中国，北京大学)

③津上英輔 「感性的質の生成構造，または感性史の試み」(2009年10月10日．第60回美学会全国大会，東京大学)

[図書] (計2件)

①津上英輔 「Souvenir -- 観光体験の額縁」
(2012年3月，西村清和編『日常性の環境美学』(勁草書房発行)，228-249ページ)

②津上英輔『あじわいの構造：感性化時代の美学』(春秋社発行，2010年12月，全258ページ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津上 英輔 (TSUGAMI Eske)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：80197657